

エリゼ・ルクリュ著，柴田匡平訳

『ルクリュの19世紀世界地理 第1期セレクション4 インドおよびインドシナ』

古今書院 2017年9月 917頁 25,000円＋税

南アジアと東南アジア大陸部を対象とする本シリーズ第4巻¹⁾は、原著『新世界地理—地球と人間—』の第8巻(1883年刊行)にあたる。本巻の章構成は下記の通りであり(括弧内の頁数は訳書のもの、[]内は訳注(以下同様に表記))、既刊分に比して単純である。

- 第1章 総説 [南アジアとインドシナ] (18頁)
- 第2章 ヒンドスタン [南アジア] (668頁)
- 第3章 インドシナ (209頁)

仮に今日、同じ範囲を扱う世界地誌を編むとすれば、おそらく南アジアで1巻、島嶼部を含む東南アジアでもう1巻ということになる(本シリーズでは東南アジア島嶼部は「太平洋および太平洋諸島」に収録)。この点は、「訳者あとがき」でもふれられているように、とりわけインドシナにおいてヨーロッパ人未踏の地が多かったという当時の(西洋世界にとっての)情報不足が関係しているだろう。

そうした状況を反映し、第3章「インドシナ」は、わずか4頁の第1節「総説」の後、現在のバングラデシュの一部(チッタゴン周辺)からアンダマン・ニコバル諸島、そしてミャンマー・タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム・マレーシアの順で地誌的な記述が続き、第7節「マレー半島」のシンガポールの紹介が章末におかれている²⁾。他方、第2章「ヒンドスタン」では、同じ第1節「総説」にまず75頁を要してから、第2節から第16節まで、現在のインド・ネパール・ブータン・パキスタン・バングラデシュ・スリランカ・モルディブの範囲をおおむね北から南の順で述べ、さらに第17節「インドの物質面および精神面に関する統計」(69頁)、第18節「インドの政府と行政」(16頁)が続く。このように、頁数だけでなく、構成・内容の面でも章による疎密の差があるのが本巻の特徴である。図版・挿画についても、204葉の図版(ほかに口絵7葉)のうち152葉、84点の挿画のうち64点が、第2章(南アジア)部

分のものである。

そのような差も含め、本巻の執筆を可能ならしめたものを一言でいえば、当時の帝国主義、つまりは西ヨーロッパ諸国による植民地化の進展である。インドでは、1857年の大反乱(シパーヒーの反乱)を経て翌1858年にイギリスの直接統治が始まり、1877年には「インド帝国」が成立した。東南アジアでも、イギリスは海峡植民地を直轄地化し(1867年)、ビルマ(ミャンマー)を併合(1886年)、さらにはマレー連合州を成立させた(1895年)。他方、フランスもインドシナ連邦を成立させ(1887年)、後にはそこにラオスを編入した(1899年)。いわゆる緩衝国として残されたシャム(タイ)を含め、ヨーロッパの影響が多方面に刻まれた時期である。

第1章では、まず「インド」の範囲について述べられる。はじめインダス河流域を指していたこの言葉は、やがてガンジス河流域からインド半島全域、そして東南アジアの島々からアラビア・エチオピアを含む広大な範囲に用いられるようになり、さらにコロンブス以降は「西インド」にまで拡大された。その上で、本巻で扱う地名としての「インド」の範囲を、「大陸的インド [インド亜大陸] と、それに直属する島嶼のみ」(2頁)に限定している。ついでインド・インドシナの自然や社会が概説されるが、その中ではインドの優れた哲学・科学をアーリア語族³⁾と結びつけた説明(5-6頁)や、マルト＝プラン⁴⁾による遷移地帯としての「インドシナ」の名称提唱の紹介(7頁)が目を引く。さらに言語・宗教の多様性を述べ、仏教に代表されるインドの精神的な拡張力と、形而下的な対外拡張の不在を対比させている(12頁)。そしてアレクサンドロス大王以降、イスラム王朝から執筆当時の植民地化に至るインド(およびインドシナ)の略史が述べられ、とくにインドシナにおいて中国人が「多くのヨーロッパ列強よりも多くの利益を、これらの国々で得て」おり、「商工業や定住という点では、中国人こそがほんとうの征服者だとみなすべき」である(17頁)と喝破している。

続く第2章第1節では、冒頭で「ヒンドスタン」の名称が吟味され、その中では玄奘『大唐西域記』⁵⁾や『マハーバーラタ』⁶⁾も参照されている⁷⁾(19-20頁)。執筆当時はヨーロッパ人による三角

測量が進行中だったが、「耐えねばならぬ疲労と、立ち向かわねばならぬ密林や沼沢の熱病は、戦闘よりも命の危険が大きい」(25頁)中での作業であった。そうして明らかになってきたインドの地形の説明は、アジアとヨーロッパがどちらも南方に3つの半島を突き出す相似形を有するというカール・リッターの指摘(26頁)から始まる。とりわけヒマラヤ山脈についての説明は詳しく、住民たちが「崇拜のあまり、厳密な観測により信仰を毀損することはできなかった」(37頁)山岳部の解明が進み、「地球の歴史におけるヒマラヤ山系は、崑崙山脈ほど古くないようである」(45頁)、「ヒマラヤ山脈の斜面における植物区は当然に気温に対応する」(53頁)といった情報が得られるようになっていた。気候についても、250カ所以上の測候所が設けられた「インドの大気の変化や等温線は、多くの西ヨーロッパ諸国よりも精確に観測され」(64頁)、通年・夏・冬の3枚の等温線図が示されている(65-67頁)。モンスーンがもたらす雨の前触れとなる雷雲は、「地元の言い回しでは「象」の群れを形成⁸⁾し、「アジアの交易におけるモンスーンの影響は甚大だったが、それでもモンスーンによる土壌の涵養に比べれば、二義的な重要性にすぎない」(71-72頁)とその意義が強調されている⁹⁾。動植物では、神酒であるソーマ用の植物¹⁰⁾や「祭事や催市、宗教儀式に集まる衆生に木陰を提供する」ベンガルポダイジュ(80-82頁)、「破壊の神の使者として尊崇される」コブラ¹¹⁾(88頁)などが紹介されている。

第2節以下は、南アジアを地域別に記述している。まず自然地理に関して目に留まったものを拾っていくと、17世紀にボンベイ(ムンバイ)一帯に定住したヨーロッパ人の死亡率は6分の5に達し、「新参の者には「人生は2回のモンスーンで終わり」という、有難くない諺が繰り返された」と、来住したヨーロッパ人がコレラなどの疾病に苦しめられた状況(449頁)をえがいている。そのために、中部ヒマラヤ地方の「{インド…評者注(以下同様に表記)}全土の夏の首都になった」シムラ周辺で、「平均標高2000メートルに新しい市街が数珠のように立ち並び、ヒンドスタン内のイギリスが形成され」(148-149頁)、同じくクマオン地方(現、ウッタラカンド州東部)でもイギリス人の保養都市が設けられ、「温帯ヨーロッパの

自然にこれほどよく似た場所はヒマラヤ地方に」ほとんどなかった(159-160頁)。また、「世界最大の雨量なのはよく知られ」ていたアッサム地方カーシ丘陵について、「雨季には隣村との通行もまったく中断」し、「言語も出自もおなじ民が多く」の集団に極度に分かれる主因になる」(370-371頁)と、気候が現地住民に及ぼす影響をえがき、地形関連でも、例えば古代以来のインダス川の河道変化について、『リグ・ヴェーダ』なども引きつつ詳しく述べ、河口部にあったケティが、カラチへの鉄道敷設によって「変動常ない水流を交易が回避できるようになると、重要性を失った」と述べるごとく、人文的事象と結びつけて説明している(201-215頁)。さらにモルディヴ諸島やその南方のチャゴス諸島の珊瑚礁については、ダーウィン(1809~82)の『ビーグル号航海記』¹²⁾にある沈降仮説にもとづく記述がみられる(592-594・597頁)。

産業面においては、当時進展しつつあった植民地化の影響が各所にみられる。西ヒマラヤ地方のシュリーナガル(スリナガル)では、ヤギの柔毛を原料とするカシミア糸について、「平均日給わずか15サンチームの哀れな数千人の職工が、不衛生な工場で織り上げる細い帯が、ヨーロッパ、とりわけフランスでかくも珍重される美しいショールの部材」となっていたが、パンジャブ地方の他都市との競合と、「とくに西洋での流行の変化により、カシミアのこの産業は大打撃をこうむり、10年のうちに大きく衰退した」(133頁)とある。また、執筆当時のボンベイは、南北戦争が終わったために「綿花輸出港としての地位を失ったが、コムギ貿易に甚大な重要性を獲得し、西ヨーロッパ諸国の穀物供給元として、黒海沿いの諸国と競合」したほか、「中国向け阿片の大型中継地のひとつ」でもあり、約30カ所の紡績工場によって「国産綿布によるマンチェスターとの競合も模索」(451-452頁)する段階にあった¹³⁾。ほかに、ダモダル炭田の一部をなすラニガンジ炭田を紹介し、「カルカッタ {コルカタ} の優位性のひとつが、半島で唯一じっさいの経済的価値をそなえる炭田地帯に近いことだ」(364-365頁)と、後にインド近代工業の中心地となる一帯を記録している。同時代の記録という意味では、セイロン島の山岳部で1825年に栽培が再開されたコーヒー豆

が「たちまち主要産品に仲間入り」し、ジャマイカなどでの奴隷解放後、セイロン（スリランカ）が「英領植民地で筆頭のコーヒー豆産地の座を保持」したと詳述される一方、茶に関しては「一部がオーストラリアにも仕向けられる」（583-584頁）といった程度の記載しかないことも、今日との比較で興味深い。また、アッサム地方東部（現、ナガランド州）に住むナーガ人の項目では、彼らが「農耕に通じ、茶園の労働者として高評価を受ける」と述べ、「茶園は少しずつ斜面を登りつつあり、最後にはイギリスのシパーヒー部隊による遠征よりも確実にナーガ人の郷国を征服するだろう」（382頁）と予見している。

南アジアでは、ヒンドゥー教とイスラム教の違いによる対立が、独立以来の課題として尾を引いているが、本巻の内容は、その違いが必ずしも絶対的なものではなかったことをうかがわせる。例えば、現在のパキスタン・インド国境地帯に住む西ヒマラヤ地方のシナー人にみられる「ムスリムではあっても鶏肉や牛肉をいっさい口にせず」、牛乳やバターも忌避する慣習が、「おそらくバラモン教の宗礼の名残りだろう」（119頁）と推定されている。ほぼパキスタンの領域に相当するイスラーム圏インドでも、「ヒンドゥーは主に都市住民で、最も実入りのよい地位を占め」るかたわら、「イスラームはカースト制を廃絶するので、熱心なムスリムが都合のよい出自を称するのは容易」で、「パンジャブでは数十万人が預言者の末裔を称し、ゆえにサイドやシャーの称号を用い」、「昨日は田吾作、今日はシェイク {長老を意味するシャイフの英語読み}。麦が高値で売れたなら、明日はサイドというわけだ」というパンジャブ地方の「格言」（228-230頁）が引用される。他方、ガンジス川流域のベンガル地方におけるムスリムは、「アラビアのムスリムとは似ても似つかぬことは本当」で、「ヒンドゥー同様にカーストに分断され」、聖域でもヒンドゥーと同じ宗礼を行っていたが、「主に北部の諸州からやってくる巡歴説教師が、彼らをヒンドゥーの寺院から引き離し、イスラームの中心的な教条を教え込んだため」、「ひとつの大きな宗教的覚醒の動き」（322頁）が起こっているとあり、この動きは東パキスタンからバングラデシュへという同地方のその後の歩みとの関わりで注目される。ネパー

ルにおいて「最も文明化」していたネワール人が「仏教徒でありながらカースト制さえ受容しており」（173-174頁）、そのネワール人を含むネパール人が「ヒンドゥスタン平原に大挙して出稼ぎに下っており」、「彼らが故郷に持ち帰る新しい考えや習慣は、おいおいネパールをヒンドゥー国家に変容させている」（181頁）との指摘も、現代につながるものである。このほか、パンジャブ地方のシーク教（226-228頁）、カーティヤワル（カチャワル）半島（現、グジャラート州南部）のジャイナ教（261-262頁）、西ガート（西ガーツ）山脈西側のコンカン地方のパールシー教（442-443頁）など、少数派宗教に対する目配りも利いている。さらに、セイロンのシンハラ人は仏教に忠実だったが、「その仏教はビルマ人やシャム人、チベット人と同一」ではなく、「セイロンの寺院には、シヴァ神やヴィシュヌ神信仰の宗礼のいくつかが保持され」、「仏教徒がそれ {=シヴァ神の表象} に祈りを妨げられることは皆無」で、「カトリックに改宗した数千人も、仏教徒であることをやめはしなかった」（572-573頁）との記載も、スリランカ内戦との関わりで考えさせられる内容を含む。

宗教的のみならず、言語・民族的にもきわめて多様なのが南アジアの特徴である。インド北西部、「起伏に富み、多数の谷に分断される」ラージプターナ地方（現、ラージャスターン州）一帯では、「住民の多様性は地表の凹凸に対応」し、先住民の一つとみられるピール人の間では「カースト制は皆無」で、「宗教儀式の大半は、アーリア人の侵攻以前の時代にさかのぼる」ものと考えられた。ピール人とイギリス軍との協定の中では、「いくつかの聖なる村にムスリムが入り込むのを禁じること」も約定（274-275頁）された。逆に、先住民がイギリス軍と対立した例としては、ビハール地方およびベンガル地方に暮らしていたサンタル人があげられ、定住化の過程で「ムガル系征服者とイギリス人が導入した土地所有制度」に苦しめられた彼らは、1855年に反乱に立ち上がったが、政府の部隊によって「無惨な虐殺」が行なわれ、「恥じることなくその有様を語れるイギリス人士官は一人もいなかった」と綴られる。その後日譚として、サンタル人の一部がアッサム地方の茶園やモーリシャス島・レユニオン島の農

園に移住し、「故郷の村に帰還するのは、ほんの一握り」(314-316頁)だったという。また、アッサム地方南部(現、メガラヤ州)のガロ人も、1871年にイギリス官憲に対して蜂起したが、「獵兵部隊が警護するイギリス人測量技師が一带を踏査し、彼らの避難先をすべて地図に落とし込んだため」、収税吏を村に入れざるを得なくなった(378頁)。地図が帝国主義の尖兵だったことを端的に物語る一節である。

既刊分の拙評でもふれたが、一人の著者が世界地誌を編む長所として、対象地域と世界各地の関わりを巨視的に述べられる点があげられる。カーティヤワル半島のディウ周辺におけるアフリカとの関わりの記載(264-265頁)、「インド半島との関係でいえば」、「まったく外にはずれた位置を占める」カルカッタが、「地場の産物を求めてやってくる船乗りの会合点」であり、さらにインドシナ半島での併合によって「帝国全体の比較的中心部に位置するようになった」ために「アジアにおけるイギリス所領の首都」に定められた(360-361頁)とする指摘、海路に恵まれ、「胡椒や桂皮[シナモン]、白檀といった最も高価な品目を入手できた」南インドが、それゆえに「外国人の植民地が最も多くなった」(489-490頁)という歴史的概観などは、その好例である。このようなインドの位置ゆえに、本巻の記述には文字通り古今東西の書物が参照されており、すでに記したものの以外にも、古代のプトレマイオスやプリニウスの著述、法顕¹⁴⁾やマルコ・ポーロおよびイブン・パットゥータなどの紀行文が聞かれている。

上記の諸節をうけ、第17・18節では、同時代におけるインドの現況が述べられる。「イギリス人は、そもそも自分たちを別箇のカースト¹⁵⁾と自認するので、同国人が肉体労働に身を落とすのを目にすれば、沽券にかかわると感じるであろう」という状況にあって、「インドは植民地ではなく、征服地なのである」(604-605頁)と、ルクリュは「植民」の意を厳密にとらえている。在住イギリス人の「富裕な官僚や軍の高官、「豪商」の階層に属する両親の大多数は、息子や娘が幼年期に達するとすぐに母国に送り出し¹⁶⁾、「ヨーロッパ人の父親と、アジア系の母親から出生した混血の「ユーラジアン¹⁷⁾」に対しては、「現地の住民も、ヨーロッパからの白人も、彼らをイギリ

ス人としてみなさない」ため、「別箇のカーストを形成するが、地位は高くない」(607頁)という。人口が2.5億人に達していたインド亜大陸では、「海外への出稼ぎも、ある程度は人口増加を緩和」していたが、「インドが遠隔地に供給する入植者の大半は名目上の自由移民でしかなく、実際には「年季奉公[身売りして渡航費に充てる]」のクーリー[苦力]」(610頁)という実態であった。当時のインドを幾度となく襲った飢饉については、「これほどの人々が不運にも食糧不足で死ぬなか、カルカッタ港からは大量の穀物が海外に輸出され続けた」、つまり「命を救えたはずのコムギを購入するには、飢餓民はあまりに貧しかった」(615頁)と植民地支配の非を訴える。だが、ザミンダール(ザミンダリー)制のおかげで、「富裕な地主層はヒンドゥーとムスリムを問わず、自らの権力と定期収入を保証するあるじイギリス人の、忠実な藩屏をもって自任」し、「インドの大半は、もうひとつの 아일랜드 に変貌させられた」(625頁)というのも、植民地インドの一面であった。インド社会を特色づけるカースト制は一項を立てて説明され、その末尾でイギリス人が「臣民の序列を一連の体系に収めようとした」一方で、奴隷制の廃止などによって「ヒンドゥーの最貧困層を勢いづかせ」、「教育を受けたヒンドゥーは、自分たちの出版物でカースト制を非難さえしている」(646頁)という作用ももたらした。後者に関しては、後のタゴール¹⁸⁾(1861~1941)やガンディー(1869~1948)の思想につながる萌芽をみてとることもできよう。当時、「世界最大のムスリム国家」であった大英帝国支配のもと、ムスリム全体としては「ヒンドゥーとの違いが強まりつつある」といってよく、「ふたつの宗教がともに力をもつ都市では非常にひんぱんに闘争が発生し、モスクや寺院が襲撃される」が、「政府は、いつの日か自らが脅威を受けたなら、どちらかに助けを求めて相手方に対抗させ、分断統治を維持できることを十分に承知している」(657-660頁)と、カーストや宗教の違いを利用した統治があまり出されている¹⁹⁾。「ヒンドゥーを一個の国民に形成する」上では、「インド半島で話される言語の多様性と、多種多様な言語が用いる種々の表音文字」(670頁)という障碍も横たわっていたが、第18節に至って「富裕な大英帝国は貧しいヒンド

スタンの犠牲のもとで生きて」(679頁) いて²⁰⁾、「あらゆるカーストの人々も、またヒンドゥーもムスリムも、いつの日か {1877年のボンベイのゼネストと} おなじように和解し、彼らを支配する外国人に対抗できないであろうか²¹⁾」(682頁)と先を見据えている。

インドシナを取り上げた第3章では、まず第1節にて、インド亜大陸とインドシナ半島の流域の配置にみられる違い、すなわち主要河川がインドで東西方向、インドシナで南北方向に流れることを指摘し、「北の高原から南の平野に地表が下がるので、等温線を越えるたびに気候の差異は拡大する」ために、「大型の民族的まとまりが生まれようもなかった」(688-689頁)と俯瞰的な比較を提示する²²⁾。以下、地誌的な各節では、インドシナでも多様な宗教に関わる記述がいくつか目を引く。チッタゴン周辺では、現地の女性を喜んで娶るムスリムに対し、「カーストの定めにと縛られたヒンドゥーは純血を維持」(700頁)しようとしており、シャムの僧院では、「寛容を旨とすることとて」、「仏像の隣に置かれたナポレオン像」を目にする(790頁)こともあった²³⁾。同じくシャムにアラビアやトルコから到来したムスリムは、「出身国が「ルーム」であること」を誇り、ローマという言葉が「西洋ではイスラームへの対抗関係を指すのに対し、極東ではその逆に、ムスリムがこの名を主張する」(792-793頁)と、用語の相対性が示されている。

ヨーロッパの影響は本章範囲内の各地にも及んでいた。「我々は善良ですが、あなた方の国では、これほど大砲だの鉄砲だのが必要なところを見ますと、人間は邪悪なのでしょうな」と語っていたニコバル島民も、「外国人商人によって退廃させられた」が、「非常に語学が達者で、彼らを訪れる船員の言葉」、すなわちマレー語・英語・ポルトガル語・ビルマ語・ヒンドゥスターニー語(ヒンディー語・ウルドゥー語など)を操る(719-720頁)という適応力もみせていた。アンナム(現、ベトナム北部・中部)を支配した「フランス政府は阿片、焼酎、賭博を専売化し、極東の諸国民に対する責めをイギリス人と分け合って」(852頁)いたし、マラッカ(ムラカ)沿岸の海賊も「とくにヨーロッパ列強が現地住民に武器を与え、お互い争わせた時期に盛んだった」の

であって、「イギリス人がしばしばマレー人を海賊扱いたしたのは、派兵の口実か、領土の併合を正当化するためだった」(883頁)という行論を、単に過去のものとして片づけてしまうことはできない。

『今昔物語集 天竺部』に代表されるような数々の仏教説話などを通じ、歴史的に日本人はとりわけ南アジアに一定の関心をいだけてきたと思われる²⁴⁾。だが近代以降、日本は「脱亜入欧」を国是のようにしてきた。「私たち日本人、とりわけ日本のインテリにとって、南アジアは、どちらかといえば、単に眺める対象でありつづけたとはいえないだろうか」。「率直に言って、日本人と、インドや東南アジアの人たちとは、コミットする場合は、〈戦争〉か〈商売〉だったという感さえ強い」。「日本人のインド認識が、知識の面ばかりか、意識に関わる面でも、いつも西欧経由ででき上がってきており、日本人の主体的な視点や、南アジアの人びとの立場に立つものとしては、ほとんどとりあげられなかった²⁵⁾。これらの文章が書かれてから約40年、日本と南アジア・東南アジアとの関係はより密接になってきているが、評者のみるところ、今なお上のような指摘を完全に払拭できたとはいきれない²⁶⁾。帝国主義のまっただ中であつたヨーロッパの一地理学者によって記された本巻は、21世紀に生きる私たちが、同じアジアに属するこの地域や、そこに暮らす人々との関わりを考える上でも、豊富な示唆を含むものといえよう。

(三木一彦)

〔注〕

- 1) 既刊分は以下の通り。①エリゼ・ルクリュ著、柴田匡平訳『ルクリュの19世紀世界地理第1期セクション1 東アジア-清帝国、朝鮮、日本-』古今書院、2015、814頁。②同上著、同上訳『同上2 北アフリカ第二部-トリポリタニア、チュニジア、アルジェリア、モロッコ、サハラ-』同上、2016、878頁。③同上著、同上訳『同上3 アメリカ合衆国』同上、2016、831頁。上記への拙評は、①歴史地理学58-3、2016、39-43頁。②歴史地理学59-3、2017、31-34頁。③歴史地理学60-2、2018、23-29頁。

- 2) 「このアジア大陸の終端には、太平洋とインド洋の全航路が収束する」(895頁)という文学的な一文で本巻は閉じられる。
- 3) ヨーロッパにおける「アーリア人」概念の歴史については、レオン・ポリアコフ著、アーリア主義研究会訳『アーリア神話—ヨーロッパにおける人種主義と民族主義の源泉—』叢書・ユニベルシタス(法政大学出版局), 1985, 512頁に詳しい。なお、サンスクリット語によるインド系アーリア人の自称「アーリア人」がインド=ヨーロッパ語族全体をさすようになった経緯については、青木 健『アーリア人』講談社選書メチエ, 2009, 243-244頁でふれられている。
- 4) マルト=ブランは1820~29年にフランス初の本格的な世界地誌を編纂した地理学者であり、ルクリュの本シリーズはその続編という位置づけであった。
- 5) 同書にもとづき、「印度」が唐でいう「月」であることや、「婆羅門国」との呼称もあることが引用されている。玄奘著、水谷真成訳『中国古典文学大系22 大唐西域記』平凡社, 1971, 56-57頁。
- 6) 「永遠なるジャンプー(閻浮樹)の巨木」にちなむ「永遠なるジャンプー大陸(閻浮提)^{ドゥフイーバ}」の呼称が紹介されている。上村勝彦訳『原典訳 マハーバーラタ6』ちくま学芸文庫, 2002, 41頁。
- 7) 中村 元『古代インド』講談社学術文庫, 2004, 19-22頁は、インドの自称が「バーラタ」であり、「国土の自覚が、バラモン教を奉じるアーリア人という視点からなされている」のに対し、仏教徒やジャイナ教徒は「ジャンプ樹のある大陸」としてインドをとらえていたことや、「玄奘がいみじくも見抜いているように、「印度」とは諸国の総称としての地域名にすぎない」ことを説き明かしている。
- 8) 訳者によれば、この部分は、山下博司『古代インドの思想—自然・文明・宗教—』ちくま新書, 2014, 40頁にある5世紀の詩人カーリダーサの詩『リトゥ・サンハーラ(季節めぐり)』の引用と目される。
- 9) ①吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波新書, 1975, 36頁によれば、インドの予算は「雨に賭けるギャンブル」と評され、モンスーンの順・不順が「インド社会の死命を制するとともに、植民地時代においては、イギリスのインドからの搾取をも制約するものであった。だから、イギリスの学校の地理学教科書では、「インドのモンスーン」が大きな問題としてとりあげられたという」。また、②ボンゼルス著、実吉捷郎訳『インド紀行 下』岩波文庫, 1945, 91頁には、「わがドイツの夏と冬との相違は、人間の健康状態や生活上の習慣への影響から見ると、決して熱帯の季節の変遷ほど意味深いものではない」とある。
- 10) 辻 直四郎訳『リグ・ヴェーダ讃歌』岩波文庫, 1970, 102-120頁は、祭式で用いられたソーマに関する「ソーマの歌」・「ソーマに酩酊した者の独白」・「ソーマの地上への将来」を収める。
- 11) ボンゼルス著、実吉捷郎訳『インド紀行 上』岩波文庫, 1943, 13-14頁には、コブラを飼育する著者を見たインド人の召使が、「神を牢獄につないで、その行動をガラス板越しに眺めるなどということ、彼は自分の信念と融和させることができなかった」ために離れていった姿が描写されている。
- 12) チャールズ・R. ダーウィン著、荒俣 宏訳『新訳 ビーグル号航海記 下』平凡社, 2013, 397-425頁。
- 13) 後の第17節で南アジア全体の産業が総括される部分でも、ボンベイ近郊の綿紡績工場やカルカッタのジュート布工場にふれるが、「ヨーロッパを模範にした物悲しい建物で、これまたヨーロッパ同様に、機械の動きに合わせて働くのは女性と子供であり、繊維屑と埃が充満する悪臭の暑熱のなかだ」(627-629頁)と手厳しい。
- 14) 「中国人の求法僧法顕が記録する古伝承では、セイロン島の商人は「鬼神と竜」と交易する」(568-569頁)との記述で、原本の訳注によれば、いわゆる沈黙交易の記録である。長沢和俊訳『法顕伝・宋雲行紀』東洋文庫(平凡社), 1971, 134・138頁。なお、訳者が本書をはじめ、前掲5)・6)・12)のような文献に一々あたって引用箇所を明記している

- ことは特筆されよう。
- 15) E. M.フォースター著、瀬尾 裕訳『インドへの道』ちくま文庫、1994、80頁には、「インドは神々が好きですよ」、「そして、イギリス人は神々気取りが好きなのね」という在印イギリス人母子の会話が登場する。なお、同書は20世紀初頭の英領インドにおけるインド人とイギリス人の関わりをよく伝えており、その末尾(526-527頁)には「インドは統一国家にならねばならぬ！ どんな外国人も入れないぞ！ ヒンズー教徒も回教徒もシーク教徒もみんな合一しろ！ 万歳！ インド万歳！ 万歳！ 万歳！」というインド人の台詞がある。
- 16) ピエール・メール著、岩本 裕訳『インド史』文庫クセジュ(白水社)、1954、108-109頁によると、アヘン戦争(1840~42)以降におけるイギリスのアジア航路整備によって、「人々がイギリスに帰国する度数は頻繁となり」、教育のために子女を本国に送るようになったという。
- 17) 宗教学者ミルチャ・エリアーデ(1907~86)が自身のインドでの体験に題をとった『マイトレイ』には、「いかにもユーラシア人らしく浅薄で過激な」友人や、「完璧なヒンディー語」で人夫を罵るユーラシア人の工事監督の「言葉が流暢で罵倒語彙の豊富なことが、労働者の目には権威失墜となった」姿がえがかれる。ただし、同書の訳注はユーラシア人を「アジア生まれのヨーロッパ人」としており、時期の差のためか、ルクリュのいう「ユーラジアン」とは定義が若干異なっている。ミルチャ・エリアーデ著、住谷春也訳「マイトレイ」(『池澤夏樹=個人編集 世界文学全集2-3 マイトレイ/軽蔑』河出書房新社)、2009、6-8頁。
- 18) 「痛まし わが国 人人を侮るゆゑに なれ汝 侮らるべし もろひと衆人とともに」で始まり、「不幸な祖国」の題で知られるタゴールの詩は、1910年に詠まれた。渡辺照宏訳『タゴール詩集—ギータンジャリー—』岩波文庫、1977、162-165頁。
- 19) 荒 松雄『ヒンドゥー教とイスラム教—南アジア史における宗教と社会—』岩波新書、1977、182頁は、「分割統治」と訳される“Divide and Rule”を、「分裂させて支配する」とする方が適訳だと述べている。
- 20) 前掲9) ①163-174頁は、1870年以後に形成された世界的な「多角的貿易決済構造」の中で、インドからの多額の本国費の搾取がイギリスを潤し、後にその問題が「富の流出」論を生み出して、インドを反英・独立の闘争に立ち上がらせる一つの思想的な力になったと述べている。
- 21) 「インド国民会議の発足は原著発刊から2年後の1885年」との訳注がある。
- 22) この指摘を敷衍すれば、東西方向のユーラシア大陸と南北方向のアフリカ・南北アメリカ大陸を比較したジャレド・ダイヤモンド著、倉骨 彰訳『銃・病原菌・鉄 上—1万3000年にわたる人類史の謎—』草思社、2000、263-286頁の議論に行き着く。
- 23) 20世紀のベトナムで生まれたカオダイ教の淵源を思わせるものがある。
- 24) 例えば、『今昔物語集』巻第5「天竺付仏前」にあるスリランカの建国伝説は、その源泉が『大唐西域記』巻11にあり、『太平記』巻32にも同話の一部がある。また、巻第4「天竺付仏後」にある竜樹の話は、芥川龍之介『青年と死』の素材となった。池上洵一編『今昔物語集 天竺・震旦部』岩波文庫、2001、170-171・176-189頁。
- 25) 前掲19) 27-28頁。
- 26) 姜尚中・狭間直樹・長崎暢子「新世紀を迎えるアジア認識」世界歴史月報28、1999、7-8頁で、姜は「この日本に住んでいると、アジアは常にどこかで意識はされていても、政治か、さもなければグルメや観光に特化された情報が入ってきています」と語っている。また同じ鼎談で長崎は、「アジアがアジアとしての意味をもとうとしたのは、政治的には植民地支配の時代、だいたい19世紀半ばから20世紀半ばまでだと思います」(9-10頁)と話している。